

シロ

シロは他の二匹の兄妹きょうだいとともに、ある人家の庭先で生まれた。なぜシロかというと、周りの人間たちが自分のことを見て、そう呼ぶからだ。それは斑の兄がブチと呼ばれ、母親と同じ毛色の妹が三毛と呼ばれるのと同じことだ。けれど彼は全身真っ白だったわけではない。お尻の近くに一か所だけ薄茶色の曖昧な丸い模様があった。けれど彼は何の抵抗もなく、人間の決めた名前を受け入れた。

ところでシロたち兄妹が生まれた場所に建つ家の住人は、あまり裕福そうではなかったが、日々の暮らしに困っているふうでもなかった。その証拠に、その家には小太郎という名のキジ猫が飼われていた。どうやら小太郎はみんなに可愛がられているらしい。人間たちは決まった餌の他に、それぞれ自分に振り向かせる楽しみのために、こぞって小太郎に自分たちの食べ物を分け与えていた。温かい布団も用意した。それは野良として生まれたシロが初めて目にした恵まれた光景だった。けれど彼は小太郎と自分の立場が違うことを充分判っていた。それはいつか母親が教えてくれたからだ。母親は自分たちが生きる場所のどこで寝て、どこで食べ物を見つけられるか、子供たちを従えていちいち教えて歩いた。そして食べ物が少ない時には、親兄妹といえども譲り合えないことを身をもって示した。

そんな日常の中で、シロは体毛を通り越して肌に触れる風に冷たさを感じるようになった。物心ついた時に見た桃の花はとっくに散り、強い太陽の光りも傾いた。秋という季節がやってきたのだ。そういえば母親や、その後をついて餌を求めに行く兄妹たちの姿をまとめて見かける時間が少なくなった。その姿を毎日見ないときもある。乳離れをした子供たちに、それぞれ独立する 때가近づいてきたようだ。シロは人間でいうと冷や飯ぐらいの次男である。親元よりも他人の中で生きる方が多い次男である。母親もあまり構わない息子である。いわんや猫のことである。いつまでも親の傍を離れない妹と違って、時々母親を頼る兄と違って、いつのまにか一匹きりでいることが多くなった。餌もいつの間にか自分一人で取っている。幸いなことに、シロが生れて、ガラクタの隅に寝床を得られるその家の庭には木が生えていた。いざとなったら虫たちを食料にすることもできるだろう。だがもっと幸いなことに、その家の住人は裕福でないわりに食べ物にはルーズだった。時々ゴミ箱の中に消費期限切れの食べ残しが無造作に捨てられていた。もちろん他の猫たちがそれに目を付けなければいけない。猫には「縄張り」というものがあるが、時々よそから縄張りを超えて飢えた輩が出張してくる。縄張り荒らしとは喧嘩するのが常道だが、シロはまだ身体が小さい。体躯の大きな猫たちが餌に群がるのを目の当たりにしながら、食べこぼした残りにありつくのがやっとだった。親も兄妹も、いつの間にか見かけなくなった。もう我が身は自分で引き受けるしかない。そしてなんとか食いつないでいた。

そんなある日、どういう訳か猫の集会で言葉を交わした、かの小太郎と遊び友達になった。友達といっても向うはれっきとした飼い猫である。どちらかという坊ちゃんの遊び相手の小間使いのような関係である。坊っちゃんが遊びを仕掛けてくれば遊ぶだけの虚しい関係である。坊っちゃんは遊び疲れると家に帰っておいしいご飯と優雅な眠りにありつく。シロはたった一匹で部屋に点る灯りを見上げながら、秋風の寒さから逃れる場所を求めて、積まれたガラクタの中で最も平らな場所を選ぼうとするが、そのときでさえ、よその野良猫が我が物顔に先に眠っているときがある。シロは戦う術を知らない。元来おとなしくできているのか、諦めが早い。元々野良には向かない性格なのだろう。

そうして何日か過ごしているうちに、その家の住人が、自分たちの飼い猫と遊んでいるシロに気が付いた。坊っちゃんがボクシングでシロをうち負かすのを見て「小太郎のいい相手だね」と面白がるものの、二匹飼う余裕はないと見えて、やはり状況は元のままである。辺りが暗くなれば坊っちゃんは家に入り、シロの目の前で戸が締められる。シロも解っている。自分が野良だということを。それでもその家の住人は善人だったと見えて、密かな話し声が漏れ聞こえた。「一時的に餌をやっても、ずっと面倒を見られなかったら、かえって可哀そうだから」「一度やると、顔を合わせるたびにくれるものだと期待されても困るし」「でも食べ物の残りが出たら、何気なく目の前でゴミ箱に入れようか」人間もいろいろ自分の都合を考えるものである。もっとも考えてくれるだけありがたいかもしれない。シロの知り合いの野良嬢などは、同情した気弱なサラリーマンが通勤の時に餌を持ってきてくれて食べていたが、それは平日だけのことなので、土日にはかえって空腹のつらさが身に染みたようだ。そのうち通りがかりの人間を見るとよだれを垂らすようになって餌を期待した。そして誰彼かまわず人間に近づいたおかげで、心の荒れたいじめっ子に打ち殺されてしまった。同情が必ずしも役に立つとは限らない。無残なことだ。シロは野良という立場で人間に頼ってはいけないと痛感した。

やがて木の葉も散って冬が来たが、それでもシロは難なく生き延びた。二度目の春を迎えた時、シロは硝子戸の中に小さくてむっちりした白い塊を発見した。よく分からないまましばらく眺めているうちに、それは硝子戸に映る自分の姿だと気が付いた。十分な食べ物にありつかなかったせい、小太郎のような伸びやかな肢体は持っていない。栄養不足で背は伸びず、何とか得た食料の栄養素は形の良い筋肉を作れなかったと見えて、歪んだゴムまりのような形をしていた。けれどそんな自分の姿に何らかの感想をいただくことさえシロは知らなかった。ただこれが自分の姿なのだと認識したばかりである。そしてその大きさを目にして、ボクシングをしても小太郎に勝てない理由がわかったような気がした。それでも相変わらず遊びを仕掛けてくる小太郎の相手をしながら、毎日あるがままに過ごし、飢えを満たすために辺りを歩き回り、腹が半分も満たされないうちは水を飲んで眠った。

それから二度目の夏が過ぎて秋が来た頃、シロは人間たちの生活の変化に気付いた。庭から見上げる人家からは美味しそうな料理の匂いがしない。魚を焼く煙も、肉を煮る匂いも、風に乗って漂ってこない。野菜を切る音も、米をとぐ音も聞こえてこない。ただ食べ物の匂いが急激にやって来て鼻を突き、殆どすぐに消えてしまうのだ。シロは不思議がった。けれどある日、ゴミ箱を覗いてようやく合点がいった。その中には魚の頭も、肉の切れ端も、野菜の根っこも入っていなかった。そこにあったのはプラスチックのひしゃげた容器だけだった。この家の住人はどうやら料理を諦めてしまったらしい。レトルト食品といわれるコンビニの空容器だけがゴミのカサを増やしていた。人間の都合は仕方ない。シロはいつもあるがままの日常を、何の抵抗もなく受け入れた。

そして瞬く間に冬がやって来て、また新しい春が来た。春は恋の季節である。さかりのついた猫たちは集団で夜通し鳴いて歩く。それでもシロはおとなしい方だった。しかし青春真っ盛りの猫たちはわめく。声を限りに長々と歌う。当然人間の睡眠を妨げる。けれど猫たちはお構いなし。それは自然の摂理なのだ。そしてどの猫がうるさくて、どの猫が静かであるかは猫好きには判別がつくが、猫と見れば目の敵にする者には、鳴き声の違いどころか顔や模様の区別さえつかない。運の悪いことにシロがいた人家の隣は、大の猫嫌いで近所でも評判の意地悪婆の家だった。婆といってもまだ50代だったが、なんでも子供の頃は貧乏に育ち、見合いで出世しそうな男を捕まえて立派な家を手に入れたらしい。だからそれを死守する気持ちが強く、ゴミ箱を荒らして大事な家を汚す猫は最大の敵だった。たしかにシロがねぐらにしている庭に建つボロ家とは誰が見ても月とスッポン、提灯に釣鐘、雲泥の差だった。けれどボロ家の奥方は、子供の頃のんびりと豊かに育ったらしく、人情に厚く他人や動物をいじめることがなかった。育ちとは哀しくも恐ろしいものである。けれど猫のシロ同様に、人間だって貧しいからといって必ずしも意地が悪いとは限らない。現実を受け止めて、その中で前向きに努力する人がいる。清貧の人もある。人の痛みを分かち合う人もいる。かの意地悪婆は我欲が強すぎるのだろう。そういう輩は財産を手に入れても、どうやら心はずっと貧乏のままらしい。

そうして猫たちは何日か限定されたさかりの間、空腹が高じて反乱者のようにその家のゴミ箱をひっくり返した。だから意地悪婆はなおさら猫が憎らしい。ときどき飼い猫である小太郎にさえチクリと嫌味を言う。本当に心底猫という生き物が嫌いなのだ。だからこの時期、おとなしく生きているにもかかわらず、姿を見せようものなら他の猫同様にシロも叩かれた。

そんなある日、ついにシロは腹が減ってどうにもたまらなくなった。さかりのついた猫たちがことごとく残飯を食い尽くすので、シロの腹に収まる分がない。もう何日も餌にありつけないシロの頭の中は、その毛並み同様に殆ど真っ白だった。あてもなくふらふらしていると、いつの間にか意地悪婆の家のゴミ箱の前に来ていた。幸いその時は留守だったようで、家はしんと静まり返っている。ゴミ箱の中にはまだ切って間もない魚の頭が入っていた。そこで何とかシロは飢えを満たすことができた。

そうしてようやく落ち着いた頃、シロは身体に異変を感じた。少し体が震える。今まで経験したことのない感覚だ。急いで隣家の庭に戻って木陰に身を横たえた時、ちょうど出てきた奥方が「おい、コラどうした？」とからかった。けれどすぐに異変に気付いて真顔で声をかけ続けた。その声はシロの意識のはるかかなたで、最後の山彦のように聞えた。次の瞬間、シロはフッと息を引き取った。

ショックを受けたのは偶然にもシロの最期を看取った奥方である。あとで家族に漏らしたところによると、奥方は周りに誰もいなくてどうしていいかわからないながら、猫好きの家族に猫の死骸を見せられないという一念で震えながら、裏庭にシロを埋めたそう。その家族の間ではこんな会話が交わされたという。「隣の婆は猫嫌いで、しょっちゅうゴミ箱の中にスプレーをかけていた。あれは毒だったに違いない、かわいそうに」「自分のことをわきまえていて、欲のない性格のいい猫だった」

生きていくうえで、人間にも都合がある。猫にも事情がある。けれどシロに口がきけたら、きっとこんなことを言っただろう。「何よりも食べ物に不自由しないって合わせなことですよ」

